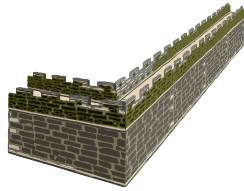


## 南京城壁



早春のある朝、私と夫は南京のホテルにいた。この大都市は、三国志の呉の孫権が開祖という古い歴史を持つ中国中部の水陸の交通の中心であり、要害の地である。

一日前の昼過ぎ、鹿児島からの直行便で上海に着き、前日は杭州を巡って、特急列車で南京に入ったのだ。新聞で僅か七万円で済まず、杭州、南京、蘇州を巡って上海観光が出来るという広告を見て申し込んだのである。二人とも鹿児島に戻って以来、一度もバスポートを手にしていなかった。姑が亡くなって二年、新聞の旅行広告欄に目が行くようになったのは、多少心にゆとりが出たのだろう。それに私は一度は

今は亡き父の心に深い陰を落とした揚子江下流の地を見ておきたいと思っていたのだ。

鹿児島空港の国際線は、大変な賑わいであった。私たちの乗った中国の飛行機は満席で、大型観光バス三台に分乗して巡るという大当たりのツアーとなっていた。鹿児島から上海まで、東京に行くよりも近く、一時間半程で到着したのには驚かされた。

その日の南京の朝は靄が濃かった。朝食後先ず長江大橋の見学である。それはコンクリートの近代的とはいえ素朴な橋であった。袂の資料館の屋上展望台であったが、揚子江の半ばかり先は靄の中であった。架橋の技術は中国では最高のものだったろうが、鳴門大橋や瀬戸大橋を知っている私には、目を見張るといほどの物とも思わなかった。ただ中国人民の意気込みの象徴の結果なのだろう。バスで南京城門に向かう。左右とも街の再開発が進んでいて、すでに近代的な建物が並んでいる地区や取り壊し

た残骸を片づけつつある地域が散在する。街の表通りの電線に洗濯物をぶらさげてあるのが目に入ったが、そんな光景を見たのは私達が最後になるのではなからうかと思つた。それほど建設の槌音が高らかな都市であつた。

バスの中で一人の男が現地の案内者に質問した。

「あなたは南京虐殺をどう思いますか」

私達は、ハツと顔色を変えた。何と心ない質問をするのだろうか。にこやかにしていてもそれは西民族の間の深い傷である。お互いに無言のうちはその傷をそつと押し隠し、新しい関係を築こうとしているのに、何をことさら逆撫でする必要があろうか。

しかしその案内者は冷静であつた。

「前の世紀にはいろいろなることがありました。しかしこれからが大切ですね」

と言葉少なに答えて話題を変えた。

南京城壁が左手に見えた。十四世紀に明の

太祖が築いたという二十四キロもの壁である。崩れかけている所を日本の援助で補修しているといふ。有名な、銃剣を手にした日本兵達が万歳をして立っている報道写真の門は説明だけで素通りして、正門に回つた。

まだ正月の飾りが残っていて、三国志に出てくるような色とりどりの甲冑姿の髭面の豪傑の人形が、石段にぼつぼつと立っていた。正門には上から扉を落とす溝が城壁の外と内の二方所あり、攻め込んだ敵兵を挟み閉じ込めるような仕掛けになっていた。そしてその城壁の石積み頑丈さ、壁の厚さは想像以上のものであつた。

石段を登って壁の上に立つた。門の上は広かつた。三階建てのビルくらいの高さだろうか、見下ろせば芽吹き初めた街路樹があつた。幾多の攻防、あまたの血の染み込んだ壁の上を歩いているのだと思つた。

それから新中国誕生の父、孫文の広大な墓地、

中山陵を訪れて昼食の後蘇州に向かう。かくして四泊五日のあわただしいが、要領よく組み立てられた旅は無事に終わった。

私達夫婦は月一回、ご近所の老人や若い人たちと世間話をする会を持っている。古老には彼らの戦争の体験談を話してもらつ。私達は中国旅行の話をして南京を訪れたことを報告した。かつての美男子で仕事を終えて最近故郷に戻り悠々自適の生活を始めたM老人が言った。

「私も戦時中に南京に行きましたよ。私は通信兵で、電線を守つたり、修理する役目でしたがあの城壁の上は死体がゴロゴロしていましたね。電線をゴツリ盗まれることがよくあって、夜見回つているときに躓くと骸骨がカラカラと壁を落ちていったものですよ」死体は野犬の餌食だったと言つ。そして犬も食べない死体は家人が恥ずかしがったものだと言つ。私はその死体は日本兵との戦いのものか処刑によるものか再度尋ねたが、結局彼が殺戮の役目ではなかつ

たと言つこと以外には口をつぐんだ。

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば

声も立てなくくづれをれて伏す

宮柵二の歌がふと脳裏に甦つた。私は十余年程後から生まれたことで、実戦の体験をせずに済んだことを感謝せずにいられない。柵二の終生の癒えることなき心の傷は体験した人でなければ理解出来ないものだ。家を建ててくれた棟梁のお父さんは、いまだにうなされて大声を上げることがあるという。かつてよく我が家を訪れて来ていた夫の会社の中途入社の人があるとき、「上官の命令で打ち首をやらされた」と洩らしたことがあつた。

先日訪れたばかりの城壁上のその足元に、死体が散乱していたこと、その場にいた人が今身近にいるということが戦争の悲惨さにまた思いを至すことになつた。

南京大虐殺があつたかなかつたかの論戦がある。戦争は戦争である。やらなければやられるから殺すのは止むを得ないという人もいる。しかし死体の数が大虐殺といえる数であるところなからうと、実際に銃剣で殺された人はいるのである。そして銃剣を持った日本人がそこにいたのである。何故銃剣を持ってそこにいたのか。

M老人は、ただ国家の命令に従つて南京にいた筈である。そして国家は何ゆえにかくも有能な若者たちに銃剣を持たせて中国に送つたのか。

歴史を客観的に判断出来るためには百年は必要かもしれないし、日本に言わせればそれなりの正当性があつてのことかもしれない。ただ子供だった私にもチャンコロと言つた侮蔑の言葉や、殺しを手柄と讃えていた当時の風潮は忘れられないでいる。ましてや眼前の殺戮や身内の無残な死体を見た中国の人達はどんな思ひだつたのだろうか。

私の父は仏教学者だったが、山砲隊長として

参戦し、一度の負傷にも係わらず終戦まで中国から戻ることになつた。

復員後は戦友たちと中国に親音様を送る会を結成し、大阪万博のラオス館を移築して「昭和寺」といふお寺を建てた。そしてそこで毎夏「東南アジア学生ゼミナール」と「全戦没者慰霊・平和祈願」の法要を行つて来た。父の死後は夫と三男が細々ながらその遺志を継いで、この夏も慰霊祭を行う。

しかし父を支えていた戦友や部下、友人や同調して協力して下さつた方々はもはやご高齢である。年々他界なさる方々が多い。戦後生まれの人々が社会の中枢を担っている今、太平洋戦争は遠くなつてしまつたのだろうか

物質的豊かさのうちに反省を伝える努力を忘れてはならないと思う。

追いつがる物売りたちを素気なく手で払い、哄笑しながら城壁を登つて行く日本人は現地の人々にどう写っているのだろうか。

教科書問題 靖国神社問題などが日中、日韓の政治問題となつている。何故中国や韓国が私達には理解出来ないほど敏感になつて居るのか。やはり相手の感情を理解しようとする努力も必要と思つ。そしていくら観光客とはいへ、日本兵の行つた具体的な事実を何も学ぶことなく出掛ければ、私達が肝を冷やしたような無神経な質問をしたり、貧しさに侮蔑をあらわにしたりする心ない日本人が後を絶たないだらう。そうした振る舞いが、現地の人々にどんな思いをさせて居るかを静かに考えて見る必要があるのではと思つ。教科書問題とはそついつことではなからうか。